山本 準優勝

アジア大会マウンテンバイク

【広州時事】広州アジア大会第7日は18日、当地などで行われた。自転車は、2大会ぶりに実施したマウンテンバイク・クロスカントリーの男女決勝が5・4キロの周回コースで行われ、男子（8周）の山本幸平（ブリヂストンアンカー＝国際アウトドア専門学院、帯農高出）は2時間11分49秒14で銀メダルだった。平野星矢（同）は4位。陳振興（香港）が2時間11分33秒91で優勝した。女子（6周）は片山梨絵（SPECIALIZED）が2時間1分15秒63で銅メダル。中込由香里（チームシーナック）は5位。任成達（中国）が1時間46分35秒82で優勝した。

（11面に関連記事）

悔しさ残る「銀」

土壇場でリズム崩す　山本

マウンテンバイク男子の最終8周目。金メダルの行方は、2人に絞り込まれていた。山本が、過去のアジア選手権でもトップ争いをした陳振興（香港）とデッドヒート。だが、山道の下りで体当たりを受けた瞬間、両足がつった。「あれでリズムを崩した。勝てなかったですね」。悔しさを、笑って包み隠した。

高速での細かいコーナリングが求められるコース。道筋を頭にたたき込んだ者が優位に立つ。この点で、山本は練習時間が足りなかった。

幕別町出身。小学生のころから競技を始め、伸び伸びと成長した。高校入学後は本気でプロを目指し、海外に出てトップ選手の技術を肌で吸収。プロ選手の夢はかなった。北京五輪での敗北も、山本の心を強くした。「50人中の46位。あの悔しさを胸に、一日一日を過ごしている」

この日、金メダルを逃し、無念の思いがまた一つ。「世界王者を目指しているので、こんなところで負けては駄目」。その気持ちを糧に、世界に挑戦する。

自転車マウンテンバイク男子クロスカントリー決勝で力走する山本幸平＝18日、中国・広州

かちまいスポーツ
記録の速報は▶kachimai.mobi
写真がほしい▶TEL0120-25-9410
Eメール▶sports@kachimai.co.jp
ファクス▶0155-25-2700

帯南商高のチームメートの声援を背に、Vチャレンジリーグ挑戦へ闘志を燃やす伊関悠（中央）

バレーボール 伊関 帯南商高 Vチャレンジリーグ 日立へ

チームに認められる選手に

高2でリベロ転向

帯南商高バレーボール部の伊関悠主将（3年）が、来春、国内トップレベルのVチャレンジリーグ所属の日立リヴァーレに入団することが内定した。十勝出身のVリーグ選手は、プレミア、チャレンジ通して、男子チャレンジリーグの東京ヴェルディでプレーする中西了将（法大、東海大四高、帯二中出）、女子同の元柏エンゼルクロスの渋谷桃子（道教大函館、帯南商高出）以来3人目。伊関は「自分がやれることを精いっぱいやって、チームに認められるプレーヤーになりたい」と闘志を燃やしている。（高橋宏幸）

伊関は豊頃町出身。茂岩小5年から地元の少年団・豊頃ランバースでバレーボールを始めた。豊頃中2年時に全道中体連で準優勝を果たし全国中学校大会に出場。少年団、中学生時代は主にレフトでアタッカーとして活躍したが、中学3年のときに北海道選抜の一員として出場したJOCジュニアオリンピックカップ全国都道府県対抗中学大会ではリベロを務めた。

帯南商高進学後は1年生からレフトで活躍。2年生の春から主将に就き、同年の新人チームからリベロに転向した。今年は3月の春高バレーに出場。6月の全道高体連は同校初の全道制覇の原動力となり、インターハイ出場を果たした。10月の千葉国体では、北海道選抜の主将としてチームをけん引した。

読みの鋭さ武器

身長は156センチで、約7年間培ったアタッカー時代の経験を生かし、読みの鋭さで勝負するレシーバー。相手のスパイクのコースを察知する能力の高さは、同校の冨田誠治監督も「才能は非凡。生まれ持ったボールに対する嗅覚（きゅうかく）がある」と太鼓判を押す。

日立からのオファーには「あこがれてはいたけれど、実際に話がくるとは思わなかった。びっくりして聞き間違いかと思った」と誰よりも本人が一番驚いたという。なかなか決断できず悩んだ時期もあったが、家族の後押しなどもあり「簡単にもらえるチャンスではないから挑戦しよう」と決意した。小、中、高校と管内の公立校で育ち、実業団まで上り詰めた伊関に対し、冨田監督は「十勝のバレーボール界がつくった宝物みたいな選手。地元の多くの指導者が喜んでいるし、期待している。速さ、スピード、高さ、強さすべてにおいて、今までの経験が役に立たないくらいレベルが違うステージ。そういう意味でも頑張らないと」と激励する。

いつかプレミアへ

日立は現在Vリーグの2部に当たるVチャレンジリーグに所属し、2008～09シーズン以来のVプレミアリーグ昇格を目指している。日立ではバレーボールだけでなく、事務作業などの仕事も行う。伊関は「バレーだけでなく、人間性などいろいろな面で成長できるようにしたい。いつかプレミアで戦えるようになりたい」と意気込んでいる。

伊関は2年の春から主将としてチームをけん引。今年は春高バレー、沖縄インターハイ、千葉国体の3つの全国大会に出場している（3月、全国高校バレーボール選抜優勝大会・春高バレーのとき）

潜在能力を評価「将来伸びる」

日立・菅原総監督

日立の菅原貴敬総監督は、「全国のいろんなリベロと比較しても目立っていた。これからリベロとして鍛えて経験を積んでいけば将来伸びていくと思う」と伊関の潜在能力を高く評価している。

伊関に注目したのは今年の全道高体連の決勝。当初は札幌大谷高の選手の視察が目的だったが、質の高い動きを見せる伊関を見て「運動能力が高く、動きが速い。読みが良くて常にスパイクのコースに入って上げていた。あそこまで読みや勘を的中させる選手はなかなかいない」とたぐいまれなセンスに一目ぼれし、獲得を決めた。

日立は昨シーズン、チャレンジリーグで優勝。Vチャレンジマッチ（入れ替え戦）でパイオニアレッドウイングスに敗れて惜しくもプレミア昇格を逃したが、27日から始まる今シーズンも昇格の有力候補の1つ。「チームとして、近い将来昇格してプレミアのトップに立つという目標でやっている。そういうチームの中で上へ上り詰めて活躍してほしい」と期待している。

アイスホッケー アジアリーグ

石岡2ゴール

アジアリーグアイスホッケーは18日、郡山などで2試合を行い、東北は6－4でハイワンに競り勝った。東北のFW石岡敏（明大、白樺学園高出）が2ゴール1アシストを記録した。

▽中国・上海
ハルラ（韓国）5（1－0、2－1、2－1）2 ドラゴン（中国）
勝点32　勝点1

▽郡山
東北 6（2－2、3－1、1－1）4 ハイワン（韓国）
勝点35　勝点19

あすからジュニアW杯

スケート 国内初開催

スピードスケートのジュニアワールドカップ（W杯）競技会苫小牧大会（国際スケート連盟主催）が20、21日、苫小牧市の苫小牧ハイランドスポーツセンターで行われる。同大会の日本開催は初めて。十勝関係では11選手が出場する。神谷衣理那（日本電産サンキョー＝白樺学園高2年）ら次世代を担う選手たちが熱戦を繰り広げる。

苫小牧大会には日本のほか、中国、カザフスタン、モンゴル、韓国が出場予定。

20日午前9時からオープニングセレモニーが開かれ、同9時半から競技開始。初日は男女500メートル1回目、男子1500メートル、女子の1000メートルと3000メートルを実施。最終日は男女500メートル2回目、男子の1000メートルと3000メートル、女子1500メートルを行う。（高橋宏幸）

＜日本選手団＞
▽監督＝白幡圭史▽コーチ＝井出敏彦、東出俊一、遠藤倫哉▽支援コーチ＝中村卓也、黒沢誠、野明弘幸▽ドクター＝村上成道▽トレーナー＝青木啓成
【男子】中村駿佑（法大）三輪準也（白樺学園高）田渕浩基（同）長谷川翼（同）小坂龍（同）近藤太郎（駒大苫小牧高）渡部知也（日体大＝池田高出）中村隼人（早来中）由井大陽（佐久長聖高）三村亨太（釧路北陽高）
【女子】神谷衣理那（日本電産サンキョー＝白樺学園高出）押切美沙紀（駒大苫小牧高＝中札内中出）永田希絵（帯南商高）高木菜那（同）谷垣彩香（同）高橋菜那（白樺学園高）辻中杏奈（岡谷南高）宮澤里沙（市立長野高）高山梨沙（駒大苫小牧高）

清水 中学女子 池田 小学男子 低学年 初V

全道少年少女柔道・団体戦

【清水、池田】第33回全道少年少女柔道大会（興部町柔道協会主催）がこのほどオホーツク管内興部町で開かれ、団体の中学校女子で清水柔道少年団、小学校男子低学年（3年以下）で池田柔道少年団がそれぞれ初優勝を飾った。

悲願の初優勝に笑顔を見せる清水柔道少年団の佐藤、千葉、鎌田（左から）

〝歴代最強布陣〟雪辱果たす　清水

○…中学校女子には16チームが参加。清水は佐藤小春（清水3年）、千葉桃子（新得3年）、鎌田汀（清水2年）の3人が出場。準優勝だった昨年の同大会と同じメンバーで臨み、雪辱を果たした。

1回戦の相手は道内でも指折りの実力者をそろえた浜頓別少年団で、最も厳しい戦いを強いられた。3人とも引き分け、代表戦で千葉が判定勝ちし、接戦をものにした。

以降は危なげなく勝ち進み、決勝も東海大四高中等部（札幌）に対し先鋒（ぽう）佐藤が大外刈りで一本勝ち、中堅千葉も内またで有効を奪い優勢勝ちを収め、悲願の初優勝を決めた。

3人は小学生から一緒に柔道に励む仲良しで、鎌田雅之監督が「歴代で一番強いメンバーがそろった」と太鼓判を押す。佐藤は「3人が自分の仕事をしっかり果たし、いい結果を残せた。このメンバーでの最後の大会だったので、優勝できて本当にうれしい」と喜んでいた。

鎌田監督は「自分が指導して20年以上になるが、全十勝規模以上での団体優勝は初めて。先鋒の佐藤が試合ごとに調子を上げ、決勝でも先に1本取れたのが大きかった」と話している。（藤原剣）

実力者そろい高い総合力発揮　池田

○…小学校低学年の部の池田は石田幸伸（池田2年）、佐藤海晟、中村亮介、原祐稀（以上同3年）、八十島悠起（幕別3年）、丸山陽久（高島2年）の6人。

23チームが参加。1、2回戦を5－0で完勝し、3回戦で優勝候補の直心館苫穂（札幌）と対戦。9月の十勝カップでは敗れた相手との〝事実上の決勝戦〟は2－2から代表戦にもつれたが、「負けられない戦い。決勝と思って全力で行った」と主将の原が大内刈りで技ありを奪って勝利。準決勝は柳柔会高畑道場（旭川）を5－0、決勝も土別誠心館道場に4－0と1ポイントも落とさず頂点に立った。

池田の全道団体優勝は各年代を通して初めて。原主将らは「みんなの力が重なって一つになった」と初優勝を喜んでいる。指導する原完治監督は「勝ちたい気持ちをみんな出して頑張れた。総合的に全道レベルがそろって穴がないチーム。このまま高学年に上がっていけば全道で活躍できる」と今後に期待している。

池田は19チームが参加した中学校男子でも3位に入賞した。（小林祐己）

池田柔道少年団初の全道団体優勝を決めた小学校低学年チーム